

旧関東州における展覧会制度

江川佳秀

現在の日本人が「満洲」という言葉から思い浮かべる地理的な範囲とは、かつて遼東半島にあった日本の租借地関東州と、その奥に広がっていた日本の傀儡国家満洲国をあわせた地域とほぼ重なるのでないだろうか。しかし、戦前の日本人にとっての「満洲」は、時代とともに少しずつ変化していたと思われる。

大まかにいって第1の段階は、旧関東州と満鉄沿線に点在する奉天や長春、哈爾濱などの都市である。1905(明治38)年に締結したポーツマス条約の結果、日本は遼東半島南端部の租借権と、南満洲鉄道会社(以下、満鉄と呼ぶ)の経営権を獲得した。それ以降日本人の移住が本格化し、関東州と沿線各地に日本人社会が形成されていった。この時期の日本人にとっては、遼東半島南端と満鉄沿線の都市が実感をもってとらえることができる「満洲」の範囲だったと思われる。その周辺に広がる茫漠たる大地は、匪賊が跋扈する未明の地だった。

第2の段階は、現在の日本人が思い浮かべるのと同じ旧関東州と旧満洲国とあわせた地域だろう。1932(昭和7)年3月に旧満洲国が「建国」されると、新天地を求めて海を渡る日本人が急増した。たまたま筆者の手元にあった統計をひもとくと、「建国」からの6年9ヶ月後の1938年(昭和13)末の時点で、すでに旧関東州に約18万人、旧満洲国に約52万2千人の日本人が暮らしている。そして旧関東州は中華民国からではなく旧満洲国からの租借地とされ、旧満洲国との一体化が強力に推し進められていた。旧関東州と旧満洲国はひとつながりの場所だった。

第3の段階は、1937(昭和12)年以降の状況である。この年、日本は旧満洲国の西部に国境を接する一帯に、蒙疆聯合委員会(後に蒙古聯合自治政府)と、中華民国臨時政府(後に王兆銘政権と合流)という二つの傀儡政権を樹立した。第二の満洲国ともいえる政権で、直後から日本人の移住が始まっている。満洲と蒙古をひとまとめにした「満蒙」という言葉自体は前の時代からあったが、この時期はことさら満洲とこの一帯を指す言葉として用いられた。日本人の意識の上で、「満洲」の地理的範囲が拡大していたのだと思える。

2009(平成21)年11月7日に豊田市美術館で開かれたシンポジウム「日本近代における東アジア表象」で、筆者は戦前の中国東北部に暮らした日本人美術家たちが現地で開いた展覧会の変遷を、この3つの段階に分けて報告した。第1の段階の展覧会は、植民地という特有の気風を漂わせながら、それでも大筋で日本の一地方画壇の活動に外ならない。第2の段階では、旧満洲国の国防国家としての性格を色濃く反映し、展覧会活動でも統制が押し進められていた。第3の段階では大東亜共栄圏という理念の下、展覧会も「日滿支」提携の一端を担うこととなった。

本稿では、この3つの段階のうち、第1の段階に旧関東州で開かれた主要な展覧会の概略を紹介しておこうと思う。日本人美術家の展覧会活動が本格化した1920年代から30年代にかけて開かれた展覧会と、その余韻ともいべき展覧会である。第2の段階に旧満洲国で開かれた展覧会は、部分的であるがすでに別稿で紹介した¹⁾。また、完全に満洲国の文化統制に組み込まれた1941(昭和16)年以降の関東州の展覧会と、第3

の段階の展覧会については、いずれ別の機会に紹介したい。

なお、あらかじめお断りしておくことがある。ひとつは文中で用いる用語である。文中では「新京」(現、長春)や「満洲国」(旧満洲国、偽満洲国家)といった当時の日本人が用いた呼称を、括弧や注釈を添えずにそのまま用いることがある。これらの呼称が正当性を欠くことは論をまたないが、記述の混乱を避けるためであって他意はない。

もうひとつは、本稿がきわめて不十分な資料をもとにしているということである。戦前現地の日本人社会で刊行された文献は、戦後の混乱の中で決定的に失われている。筆者が目にすることができた出品目録や展覧会図録はきわめて少ない。そのため多くは現地で刊行された新聞や雑誌の記事から復元を試みたが、それも難しい展覧会が少なくない。主要な展覧会を見落としている可能性もある。あくまで調査の経過報告とご理解いただきたい。

¹拙稿「満洲国美術展覧会をめぐる」『昭和期美術展覧会の研究 戦前編』東京文化財研究所 平成21年4月 pp.183-216

満洲美術展覧会(満鉄美術展覧会)

満鉄社会課が主催し、「美術の民衆化」と「満洲に於ける美術趣味の向上」を目的に開催した¹。1923(大正12)年から1924(大正13)年の間に3回開かれた²。満鉄は沿線住民のための福利厚生事業として音楽会や料理講習会などを行っていたが、そのひとつだった。それまでも関東州や満鉄沿線各地では、散発的に小規模な展覧会が開かれていたが、ある程度の規模と継続性を持った展覧会はこれが最初だった。

展覧会を発案し、実務を取り仕切ったのは、満鉄社会課嘱託の洋画家三井良太郎である。三井は白馬会葵橋研究所に学び、同研究所で幹事を勤めたあと、1916(大正5)年に大連に渡った。当初大連で洋画研究所を主宰していたが、1922(大正11)年から満鉄嘱託となり、各地で洋画講習会や小規模な展覧会を開いた³。満洲美術展覧会は各地で開かれた展覧会の中央展といった位置づけがあったらしく、第3回展はあらかじめ各地で展覧会を開き、それを受けて最後に開かれた⁴。また、各地で開かれた小規模な展覧会のひとつである撫順美術展覧会の規定には、満洲美術展覧会で2等賞以上の受賞者は無鑑査で処遇するという規定があった⁵。

第1回展は、第1部(東洋画)、第2部(西洋画)、第3部(彫刻)、第4部(工芸美術、参考品)の4部門を設けた。第4部の参考品とは古美術品である。出品目録によると、第2部の出品者には萬鐵五郎と林倭衛の名前がある。萬は、審査員のひとり眞山孝治と面識があったので⁶、その縁で作品が並んだのかもしれない。

第2回展は、当初10月中旬の開催を予定していたが、9月1日に関東大震災が発生したため、11月に延期された⁷。この回から第1部(東洋画)、第2部(西洋画)、第3部(彫刻)の3部門となった。また、大連のあと奉天に巡回した。この回は大連にあった美術グルー



第3回満洲美術展覧会(満鉄美術展覧会)ポスター
図案は眞山孝次

ブ曠原社と三井との間に反目があり、審査員の辞退など混乱があったという⁸。
 第3回展は、前回の反省から曠原社を交えた会合で要項と展覧会委員を決めた⁸。また、
 初めて審査員を日本から招聘することとし、朝鮮美術展覧会の審査のため朝鮮半島ま
 で渡る藤島武二と小室翠雲に依頼した。しかし藤島は都合により長原孝太郎と交替し⁹、
 小室は展覧会関係者との感情的な行き違いがあって大連に到着してから辞退した¹⁰。
 1925(大正14)年は大連勸業博覧会美術館が開かれ、第4回展は中止された²。以降、
 開かれることはなかった。

■第1回

会期：1923(大正12)年2月23-27日

会場：大連・満蒙文化協会

主催：満鉄社会課

委員長	牧野虎次	(満鉄社会課長)
委員	築島信司	
	他5名	
鑑査員(東洋画)	仁林聾仙	
鑑査員(東洋画)	石田吟松	
鑑査員(西洋画)	谷山静生	
鑑査員(西洋画)	三井良太郎	
鑑査員(参考品)	八木装三郎	
審査委員長	梅野實三	(満鉄理事)
審査員(東洋画)	仁林聾仙	
審査員(東洋画)	石田吟松	
審査員(西洋画)	谷山静生	
審査員(西洋画)	眞山孝次	
審査員(西洋画)	三井良太郎	
	他	
幹事	築島信司	
	他	
顧問	上田恭輔	
顧問	梅野 實	註 ¹¹

出品点数：

	第1部(東洋画)	第2部(西洋画)	第3部(彫刻)	第4部(工芸美術・参考品)
応募	170点		不詳	不詳
入選	32点	53点	不詳	57点
鑑査員、 審査員他作品	7点	11点	不詳	不詳
展示計	39点	64点	5点	57点

註¹²

■第2回

会期：1923(大正12)年11月21-27日

会場：大連・大倉ビルディング

